

## 念仏者の人生

浄土真宗の僧侶であり、教育者でもあった東井義雄先生の著書（絶筆）、『仏の声を聞く』の中に、次のような味わい深いお話が書かれていました。

それは、先生の晩年のことです。

小学校の教員をしておられた四十六歳になるご長男が、体育の授業中に突然倒れ、意識不明のまま病院に運ばれたのです。

何とか一命は取り止めたものの、意識は再び戻る事がなく、そこから長い闘病生活が始まります。しかも、その二年前に、先生ご自身が癌の手術を受けられ、まだ治療中の身でもあったのです。

身動き一つしない我が子の姿に、「代わってやれないことが、こんなにも厳しいものか」とその胸の内を語っていますが、先生にとって、まさに「死ぬにも死ねない」事態に直面されたのです。

折りしも、そんな先生のもとに、見知らぬ女性から、一通の手紙が送られてきました。部厚い封書に書かれたその内容は、凡そ次のようなものでした。

阿弥陀仏や親鸞聖人を頼りにし、法華経に尻を向けているから、仏さまが『仏罰』をお当てになったのです。日蓮大聖人様も『念仏無間』とおっしゃっているではありませんか。『念仏無間』のお言葉そのままのことに、今出会っておられるのです。

寺の住職としての体面もあるでしょうが、そんなものは、いさぎよく振り捨てて、法華経と日蓮大聖人様に帰依しなさい。災難はたちどころに消滅します。私が、自分の体験で申し上げているのです。間違いありません

余りにも程度の低い手紙ですが、意外とこういう宗教観を持った人が多いのです。

すなわち、自らが信じている仏さまのお心にかなう者には「福」を与えるが、逆く者には「罰」を与える。

そして、その「福」というのが、「無病息災」「家運隆盛」「商売繁盛」等々といったもので、それを与えてもらうことが「人生の幸せ」と考えるのです。

ですから、寺の住職が癌にとりつかれたり、その後継者が突然、意識不明で倒れたりすると、「不幸な人たちだなあ。そんな仏さまを信じているから罰が当たったんだ」と思ってしまうのです。

この手紙に先生は、お礼の言葉まで添えて、次のような返事を出されたのです。

私は、半世紀以上も学校の教員を勤めてきましたが、勉強の出来ない、頭の悪い子を見捨てたり、教師の言うことを聞かないで、非行を重ねる子供を罰で脅したり、退学させたり

する教員にだけはなりたくないと考えてきました。

勉強が分からなくて、学校へ来る楽しみを失っている子供には、つまずきの原因を確かめてそれを正し、分かる喜びを育ててやるのが教員の仕事だと考えてきました。

教師に背き、非行を重ねている子供には、その子がそうしなければならぬわけを確かめ、本当の生きがいを目覚めさせるのが、教員の仕事だと考えてきました。

私が、そのように考えざるを得なくなったのは、せつかく寺に生まれさせて頂きながら、如来さま（阿弥陀さま）に逆き、如来さまを謗る罪さえも犯してきた私を、如来さまは罰することもなさらず、見捨てることもなさらないばかりか、ひたすら生かし続けて下さったからでした。

気がついてみたら、逆いている真っ最中も、謗っている真っ最中も、私は、阿弥陀さまのお慈悲のどまんなかのいたのです。

それ以後、私は、仏さまであろうが、学校の先生であろうが、家庭の親であろうが、『凡・聖・逆・謗』（あらゆる人々）を齊しく抱きとって下さる方は『ほんもの』、見捨てたり、罰を与えるような方は、どんなに大評判の方であっても『にせもの』と考えるくせがついてしまいました。

私どもが、ただいま、大変つらく、きびしいことにあっているのは事実ですが、これは『仏罰』などではなく、私どもが長い間、知らず知らずの間に作ってきた『因（タネ）』や『縁（条件）』によるもので、つつしんで、お受けするしかございません。

それにつけましても『たとい罪業は深重なりとも、必ず救う』と呼んで下さる『阿弥陀さま』をいよいよ頼もしく、仰がせていただくばかりです。

どうか、ご縁がございましたら、あなた様も、『凡・聖・逆・謗』を齊しく撰め取って下さる『阿弥陀さま』のお呼び声に、耳を傾けて下さるようお願い申し上げます。

この先生のお手紙を通して、阿弥陀さまとはどういうお方なのか、また念仏者の人生とはどんなものか、ということが本当によく分かると思います。

阿弥陀さまは、ご自分のお心にかなうような「立派な者」だけを救おうというのではありません。それどころか、そのお心に逆くような「愚かな者」こそ救わずにはおれない、というのが阿弥陀さまなのです。

思えば、私の日暮らしは、仏さまのお心に逆くことばかりであります。

思い通りにいっている時は、自分一人が偉いように自惚れ、思い通りにならなくなると、「あいつのせいじゃ、こいつが悪いからじゃ」と周りを攻め立て、愚痴をこぼす。まことに粗末至極な私であります。

そんな私を、「だからこそ捨ててはおけないんだよ」とおっしゃって下さるお方が阿弥陀さまなのです。

そのお心を知る時、私にはこの上もない安心感が生まれてきます。

「ほんもの的大悲心」とはこういうことを言うのです。

まさに、「無条件のお救い」なのです。

また、先生は「我が身に起きる出来事は、私がお受けするしかない」とおっしゃっていますが、ここに念仏者としての人生観をはっきりと窺い知ることが出来ます。

私たちの世界は、「因果の道理」で成り立っています。

我が身に起きること（果）は、他から与えられたものでも、偶然起きたものでもありません。すべて自分がまいたタネ（因・縁）が我が身の上に芽生えたものです。ですから、自分で刈り取る以外、誰も代わってはくれません。その上、お粗末な私がまくタネですから、何が起きてもおかしくはないのです。

苦しみも 悲しみも  
自分の荷は 自分で背負って  
歩きぬかせてもらう  
わたしの人生だから

と、先生はおっしゃっていますが、辛くても苦しくても、決して言い訳をせず、自らの人生は自らの責任において果たしていく。

これが念仏者の人生です。

しかも、こうして自らの人生をひたすら歩み続ける者に寄り添い、励まし、温かい心で包み込んで下さる方（阿弥陀さま）がいらっしゃるのです。まことに頼もしい限りです。

東井先生の晩年の出来事を通して、改めて念仏者の人生のたくましさを知らされました。

平成17年6月 「光明寺だより40号」より